

漱石作品「二つの百円」

Junko Higasa 2016.9.17

ひとつ目は『野分』である。田舎の中学校教師となった文学者白井道也が行う演説は、社会主義と受け止められた。そのことで周りの大人に先導されるまま教師いじめに加担した生徒の一人である高柳周作は、大学を卒業して文学士となり、当時理解できなかった道也の論を理解し師と仰ぐ。同時に教師を辞めた道也の貧困に胸を痛める。そして百円の借金返済に迫られている場に遭遇し「かつて越後の高田で先生をいじめて追い出した弟子の一人です」と告白し、親友が用立ててくれた自分の結核療養費「百円」を渡し、道也の原稿『人格論』を譲ってもらう。

ふたつ目は『道草』である。生活に困窮する養父は、実家へ復籍した健三に再三金をせびりに来る。健三は今後の関係を断つために一括「百円」を払う。

先の「百円」は高柳君の過去の誤った行為の代償であり、自分の命と引き換えの金額である。後の「百円」は、養育の恩に対する不義理の代償であり、自分の未来と引き換えの金額である。すなわち高柳君にとっても健三にとっても「百円」は過去を清算し、自分の人生を買い戻す金額なのである。

実際「百円」は、漱石こと金之助が夏目家復籍から21年後に、養父塩原昌之助と一切の関係を断った金額であった。すなわち「百円」は漱石夏目金之助が過去を清算し、自分の人生を買い戻し、自分の心を自ら所有するための、自分の命の値段だった。